

## 男女共同参画と佐賀の歴史

末岡 曉美 (郷土史研究家)

佐賀の歴史に興味を持ち日頃からコツコツと調べ物をしてきた南里早智子さんと私は、「肥前さが幕末維新博覧会」を意識し、南里さんが所有する南里邸で、昨年3月から足掛け8ヶ月間パネル展を開催しました。

テーマの一つに女性を選び、幕末に世界を見ていた佐賀の人々の子どもの世代の女性たちを紹介しました。上品で穏やかな語感を伴う「女性」よりも「女」という言葉を使ったほうが、より身近に彼女たちを感じていただけのではないかと思い、「激動の時代を生きた佐賀に縁ある女たち」と題しました。

二人の知恵をしぼり家計費をやりくりして企画に没頭していたら、協力者がたくさん現れ、マスメディアでも度々取り上げられるようになりました。男女共同参画の視点から始めた企画ではなかったのですが、私たちが紹介してきた鐘ヶ江録子、日下部米鶴、クーデンホーフ光子、江木欣々、石井筆子、黒田チカ、大橋リュフは、男性も女性も、意欲に応じて、あらゆる分野で活躍できる男女共同参画社会の先駆けの女性たちでした。

そのひとりである大橋リュフさんは明治32年に太良町に生まれ、晩年に故郷に1億圓を寄贈しました。太良町はこれで大橋記念図書館を建設し、教育振興に勤めているので、大橋リュフの名は太良町ではよく知られています。しかし、彼女が医者であったことやアメリカ、ドイツでも医学を学び、医学博士の学位を取得したことを知る人はほとんどありませんでした。

リュフさんが学んだ東京女子医専は、1900(明治33)年に吉岡荒太(佐賀出身)、弥生夫妻が東京女医学校として創設しました。東京女医学校の初めての卒業式には「手術をして平気で血を流すような殺伐な女が増えたら国が滅びてしまう」との来賓の発言で混乱する中、最後に登壇した女子教育に理解の深い大隈重信が「十年ないし十五年の歳月をもって、事実に見れきたる成績の如何によって、結果がわかるのであるんであ

1868-2018  
激動の時代を生きた  
佐賀に縁ある  
女たち

石井筆子・鐘ヶ江録子・江木欣々  
クーデンホーフ光子・黒田チカ・大橋リュフ・日下部米鶴

3月17日～10月21日  
月・土・日・祝日の10:00～17:00  
佐賀市柳町9-8

入場無料 南里邸 Facebookもチェック

パネル展のチラシ

る」と女医亡国論を論破しその場が治まったというエピソードがあります。

リュフさんが21歳で産婦人科医となった当時、女医はとても稀有な存在で、あまり頼りにされませんでした。これではいけないと思ったリュフさんは、「排日移民法」が実施され、日本人への風当たりが大変強かったアメリカに留学し「ジャップ」と侮蔑されながら進んだ医学を学び、ドクターとなり、その後ドイツでも細菌学を学びドクトルになったそうです。更に帰国後、東北大学で学び、昭和8年に医学博士の学位を取得しました。ちなみに、昭和12年4月までに学位を取得した日本の博士は12,356人。このうち女性は21人で、佐賀出身者としてリュフさんと黒田チカさんがこの中にいます。

佐賀の歴史を男女共同参画の視点で見直すと、いろいろと面白いことに気付くことができ元気が出てきます。

## 平成30年度「男女共同参画推進フォーラム」参加報告

**事業名** 独立行政法人国立女性教育会館 平成30年度「男女共同参画推進フォーラム」派遣事業

**目的** 女性活躍推進、女性のキャリア形成支援、ワーク・ライフ・バランス等の課題の解決に資するための研修の実施及び関係機関・団体等の相互交流の促進を支援する目的で開催される国立女性教育会館主催の平成30年度「男女共同参画推進フォーラム」に会員、その他学生等を派遣し、現在の男女共同参画推進への課題や全国の活動団体の実情等を学び、派遣者の学習効果及び当団体の今後の活動に資する。

**派遣者氏名** **山崎和子** 特定非営利活動法人女性参画研究会・さが 理事長  
**内田信子** // 副理事長  
(学校法人旭学園 理事長)  
**干潟由美子** 特定非営利活動法人女性参画研究会・さが 会員  
**前田清香** 佐賀女子短期大学こども未来学科 1年  
**丸山俊江** // 地域みらい学科 1年

**内容** **派遣日時** 平成30年8月30日(木)～9月1日(土)  
**派遣先** 国立女性教育会館(埼玉県比企郡嵐山町菅谷728)

このフォーラムは、男女共同参画を推進する行政、女性団体、NPO、大学、企業などの担当者が一堂に会し、広く男女共同参画を学ぶ方々も加わり、課題の共有と課題解決のための方策を探ると同時に、組織分野を越え、連携・協働して男女共同参画を推進するためのネットワーク形成を図ることを目指して、毎年、この時期に開催される国内最大級のフォーラムです。

北海道から沖縄まで全国各地から約1,200人以上が集い、「つなぐ、あらたな明日へ～女性も男性もともに暮らしやすい社会を創る～」のテーマでシンポジウム、特別講演、映画上映、ワークショップ、パネル展示が実施されました。

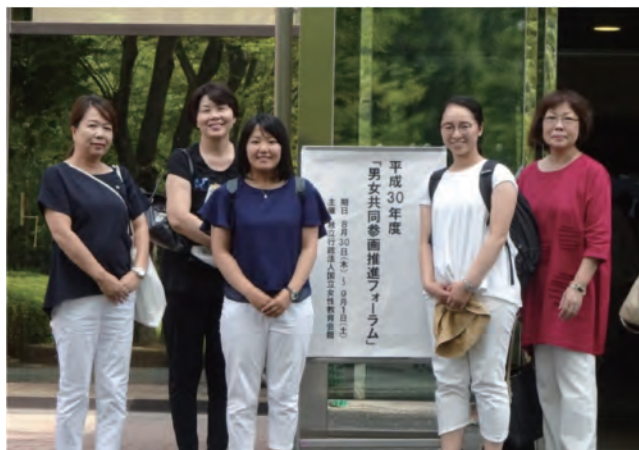
本研修は、昨年に引き続き、佐賀県立男女共同参画センターの県民グループ派遣・招へい支援事業に採択され、佐賀県の助成を受け実現しました。

今回は、理事長の山崎和子、副理事長の内田信子、会員の干潟由美子のほか佐賀女子短期大学のご理解とご協力で、こども未来学科の学生、前田清香、丸山俊江のお二人を含め、5名の参加でした。

### 山崎 和子

毎年、開催されているNWECフォーラムを当法人の事業に組んで2年目です。

昨年参加した際、明治大学の堀口悦子ゼミの学生が10名を超えて参加されていたのに接し、「来年は学生さんを連れて来ることができたら良いね」と役員で話したところでしたが、望めば叶うもので、佐賀女子短期大



研修棟玄関にて(左から干潟、内田、前田、丸山、山崎)

学の内田理事長さん、田口学長さんのご理解とご支援で、こども未来学科と地域みらい学科からお二人の学生さんの参加が実現しました。

彼女たちは、保育士と養護教諭になるという明確な目的をもっているため、ワークショップを上手く選び、食事時間には感想を話し、さまざまな質問をしてくれました。

また、レストランでは、長崎の大学生と話が弾んだり、その他多くの日頃、接することの少なかった方々との交流など、今回の経験は今後の彼女たちの生き方にきっと役に立つことでしょう。

私にとっては、昨年からの宿題ともいえる「若い世代の人たちそれぞれが抱えている生き難さの背景には、ジェンダーの問題があり、あなたたちもその当事者であることを具体的に伝えていかなくてはならない。」ということへの一歩が踏み出せた気がしています。

今回のフォーラムで、国立女性教育会館 内海房子理事長の開会挨拶や特別講演の国谷裕子講師の講演でも取り上げられた持続可能な開発目標(SDGs(エスディ

ージーズ))は、一番重要な課題だと思っています。

2015年9月の国連サミットにおいて、「持続可能な開発のための2030アジェンダ(通称：2030アジェンダ)」が採択され、2030アジェンダでは、17の目標と169のターゲットからなるSDGsが掲げられました。2018年は、SDGsの実施元年になります。

SDGsでは、ジェンダー平等と女性のエンパワーメントが貧困や飢餓を撲滅し、すべての女性及び女兒の能力強化を行うことを目標の一つに掲げています。さらに、国谷さんは、5番目の目標「ジェンダー平等」の実現は、他の16の目標実現の鍵だとも言われました。このことは、私が参加した複数のワークショップにおいても「ジェンダーの主流化」という言葉で語られていました。

最後のプログラム、ワールドカフェの最初のテーブルは、なんと、今回、学生さんを誘うきっかけとなった明治大学の堀口ゼミの堀口悦子さんとアバンセの杉山さん、山崎ともうお一方の4名のグループでした。

今回の事業は、佐賀県立男女共同参画センターの「平成30年度県民グループ派遣・招へい支援事業」に採択され、佐賀県の助成金を受け実施しましたが、大きな成果があったことはメンバーの報告から読み取っていただけたと思います。

この研修事業の実現に関わっていただいた県立男女共同参画センター、佐賀女子短期大学ほか関係のみな様方のご支援、ご協力に感謝申し上げます。

### 内田 信子

佐賀県の男女共同参画運動はアバンセが開設された平成7年、全国で同時多発的に発生した運動と呼応しながら急激に高まりを見せました。平成7年当時、36歳だった私は、記者として北京女性会議NGOフォーラムに参加する「佐賀県翼の会」の皆さんに同行取材しました。

そして、世界の女性達の熱い思いを肌で感じる事ができました。

私事ですが、今年、学校法人の理事長となり、同じく北京会議に参加した田口香津子学長と共に、女性教育に携わっています。2人でよく話すのは、あの経験が今の私たちの転機になったということです。

残念ながら男女共同参画運動はその後、下火となり、担い手の高齢化が課題となっています。私は、昨年初めてヌエックでの男女共同参画フォーラムに参加し、



講堂玄関にて



懇親会で赤松良子さんと

全国から参加した先輩たちの衰えをみせぬ情熱に触れました。また男女大学生が参加している姿を目にし、「来年は若者をこの場に連れて来たい。北京会議での私たちのように百聞は一見にしかずだから。」と願うようになりました。そして今年、その願いはかない、20代の女子学生2人を引率することができました。

アクションはすぐに形になるとは限りません。しかし、私と田口さんは、23年前の経験を自分たちの中で温め、一步を踏み出す契機としました。

会場での学生の目の輝きを見て、確かに何か引き継がれたと実感しています。

23年前、私たちが北京で記念撮影をしていただいた赤松良子さんとヌエックで再会し、学生と共に収めることが出来た写真は、私の宝物です。できれば毎年この催しに若者が参加し、「ガラスの天井」を打ち破る連帯と人間的な成長を手にしてくれればと願っています。

また今年難産の末に成立した「政治分野における男女共同参画推進法」や、注目され始めたSDGs、今年大きなニュースとなった東京医科大学の女性への不正差別など、やはりこの場に来ると掴める最新の情報や情勢分析は貴重です。1年に1度、自分の学びの場としてこの機会は大切にしていきたいと思っています。

最後に、送り出してくださった関係者の皆様に心からの感謝と、学生達をこれからも見守っていくことをお約束して結びといたします。

## 干潟 由美子

まだ夏の日差しが残る季節、期待と不安に胸を膨らませ、初めて国立女性教育会館へと向かいました。NWECの男女共同参画フォーラムに参加させていただくことが決まってから、この分野でどんなことが学べるのか、自分のやりたいことに繋がることなのか、戸惑いの中がありました。

会場に一步足を踏み入れると、多くの女性たちの熱気に圧倒されたと同時に、これから始まる未知の世界にわくわくしている自分がいました。

2015年9月、国連の総会で139か国が全会一致で採択された「2030アジェンダ」貧困のない、持続可能な世界を次世代に受け継いでいくことを目指した世界規模の目標のSDGs。17のゴールと169のターゲット。その両輪として、2015年にパリで開かれた、温室効果ガス削減に関する国際的取り決めを話し合う「国連気候変動枠組条約締約国会議（通称COP）」で合意されたパリ協定。世界の平均気温上昇を産業革命以前に比べて2℃より十分低く保ち、1.5℃に抑える努力をする目標が掲げられています。

特別講演での講師、国谷裕子さんはこう言います。これは社会・企業・個人の在り方を定義していくもので、2015年を振り返ったとき、人類にとって最も重要な年になるだろうと言われていた。SDGsの前文には「我々はこの共同の旅路に乗り出すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う。」と「我々は、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」という二つの柱は大変な危機感を持って世界が採択したのだとも。

私たちは日々、様々な問題に直面しています。自己責任論が多く聞かれる中、いつ誰が貧困という状況に陥るかもしれない不安定な世の中です。自己責任論だけでは何も解決していきません。私たちから見える一つの課題は底辺では様々な課題とつながっていることが多



ワークショップの運営者と

く、多くのステークホルダーが関わっていくことが望まれています。

問題を私たちの課題として捉え、市民、企業、行政が一緒になって課題解決していくことが大切だと考えます。また、関わる全ての人たちがフェアで、すべての人に利益をもたらしてくれることこそが地域の課題解決、ひいては地域活性化につながるものと信じています。

この3日間、NWECで多くのことを学び、自分の中で確信がもてなかったものが確信に変わっていきました。佐賀の地で様々な課題解決をしている方々とつながりを作りながら、明日へと一步を踏み出したいと思います。アバンセと法人には、このような機会を与えていただき感謝します。

## 前田 清香

NWECフォーラムに参加させていただいて、まず、感じたことは、男女共同参画推進に関わっていらっしゃる方のパワーがものすごく溢れていることでした。参加する前の私は、憲法で両性の平等が保障され、法整備も進み、女性の働く環境は整いつつあるのだと思っていました。

しかし、実際は、女性には仕事を任せられないといった古くからの考え方が残っていたり、セクハラ問題が起きていたり、働き方の多様化が進んでいます。その結果、非正規雇用が増加し、働きにくさ・子育てのしにくさが生じ、議員や企業役員の中に女性が少なく、意見が反映されにくいといった問題があり、到底男女平等が実現している社会ではないということでした。世界的に見ても、男女平等指数の順位は114位(2018年)と低い水準となっています。男女平等に向けて、日本国憲法作成時に尽力されたベアテさんや、男女雇用機会均等法制定時に平等法にするべきであると訴え活動された方がいたこと、現在も女性の地位向上を目指し、活動されている方がいらっしゃることを知りました。権利が保障されて当たり前ではない時代に声を上げることの難しさやその人たちの強さを感じ、また現在も声を上げ続けておられるNWECに集まった人たちのパワーあふれる姿を間近で感じる事ができました。

最初は、「持続可能な社会」、「子どもの貧困」、「防災」といった言葉と男女共同参画推進がうまく結びつきませんでした。参加してみると、SDGsの存在や、女性を取

り巻く環境が子どもたちの生きていく環境に大きく影響していること、地域とのかかわりが深まることが防災につながることを学びました。問題と問題が繋がっていると感じ、解決は簡単ではないが、それぞれが声を上げ発信することが大切なのだと感じました。

今回の研修で、これまで知ることのなかった視点を知ることができました。普段のニュースの見方や、身の回りの制度や問題の見方が大きく変わり、自分自身の視野が広がりました。

今回の学びを、短大での学びや将来の仕事に生かしていきたいです。また、NPO 法人女性参画研究会・さが及び佐賀女子短期大学の支援を受け、貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

### 丸山 俊江

私はこれまで、男女平等や差別などについて、真剣に考えたことがありませんでした。生活の中で時々、女性だからという理由での不平等を感じることはありましたが、私は、我慢して耐えることが一番の解決策だと思い、何も考えないようにしていました。

しかし、今回、「男女共同参画フォーラム」に参加し、考え方が180度変わりました。私は、男女平等、男女共同参画社会の実現のためには、“まずは興味関心を持ち、自ら問題について考え、そして行動を起こす”ことが大切だと思います。

今回、私はフォーラムに参加し、まず一つ目に大切だと感じたことは、興味や関心を持つことです。私自身今回のフォーラム参加をきっかけに日常で多くのニュースや事件に触れる中で、平等や差別という言葉に反応し、興味関心を持って観るようになりました。これまでは素通りにしていた問題であっても、まずは興味や関心を持



ワークショップの後、嘉田由紀子さんから助言を



研修棟に向かう参加者

つことで、「こんな問題が起こっているのか。」「世の中はこんな風に動き始めているのか。」など多くの気づきがありました。

このようなことから、興味関心を持つことがまずは始まりであることに気付かされ、一つの大切なポイントだと思いました。

もう一つは、考えることです。興味関心を持ち、より多くの情報をもとに考え、自分の意見を持つことが大切だと思いました。情報を知っているだけでは、何も変化は起きないと思います。そのため、私は考える力を身につけ、自分の意見が持てる人材になりたいと思いました。

最後にもう一つ大切だと感じたことは行動することです。興味関心を持ち、気づき考え、自分の意見を持つだけでなく、その上で、行動を起こすことが大切だと思いました。このように思った理由は、フォーラム参加者の方々やワークショップ登壇者の方、皆さんが信念を持って、自分の考えを語っている姿に感動し、私も微力だが力になりたいと思えるようになったからです。フォーラム参加の皆さんは、もの凄くパワーがあり、強く、そしてカッコいい方々ばかりでした。私は、真剣に考え、行動する人たちと出会うことが出来、感動と行動することへの意識変革を起こすことができたと思います。

私はまだまだ興味関心を持ち、気づき、考える段階であり、行動を起こすことはできていないと思います。しかしいずれは、フォーラム参加者の皆さんの様に、自分の考えを持ち、その考えを発信していける人材になりたいと考えています。

今回は、NPO 法人女性参画研究会・さが、佐賀女子短期大学のご支援でこの貴重なフォーラムに参加させていただき、心より感謝申し上げます。私の人生において、大変に貴重な経験になったことを確信しております。

## 公開講演会(平成29年度アバンセ県民グループ企画支援事業)報告

### 演題 ソウル東京2000キロ 朝鮮通信使の道をたどる ～世界が認めた平和と友好の歴史～

講師 真弓 智恵子さん(フリーライター・元佐賀新聞記者)

日時 2018年9月29日(土)14:00～16:00

場所 佐賀市ほほえみ館 4階 視聴覚室

2017年秋、日韓の1,000件以上の記録が「朝鮮通信使に関する記憶17～19世紀の日韓間の平和の構築と文化の歴史」としてユネスコ世界記憶遺産に登録されたのを機に、朝鮮通信使の200年の平和外交を学び、日韓両国に存在する女性を巡る課題について、認識の違いを超えて互いに理解するヒントが見つかるのではないかと実施しました。

講演では、両国の歴史について、倭乱(豊臣秀吉による文禄の役の朝鮮側からの呼称)による拉致等があったにも関わらず、平和の象徴としての通信使の派遣が200年余も継続したことや記録遺産の内容、視察団の構成や行程などです。

また、講師の真弓さんは、以前から韓国の伝統酒などの取材を通して韓国に行き来されており、昨年の「21世紀の朝鮮通信使ソウル～東京2000キロの日韓友情ウォーク」に参加され、4月1日から52日間かけて、ソウルから東京まで、延べ2,756名で歩かれた中で体験やエピソードを話されました。



講演する真弓智恵子さん

その中で、日韓の文化、習慣の違いの例として、宿泊施設で日本人である講師は部屋に追加の布団を1組持込んで寝たが、韓国の女性は1台のベッドに2人で寝るのが当たり前らしく、布団の持込を怪訝な顔をされたというエピソードも話されました。

今回の講演では、両国の女性たちの生き方を詳細に比較することはできませんでしたが、講師の最後の発言、「韓国の女性も日本の女性も同じだと思う」という言葉からは、講師がウォーク中に肌で感じた文化・習慣・歴史認識の違いを超えて、本質的なところは一緒だと感じたということだと受け取りました。(内野)

### 編集後記

●学校法人旭学園(佐賀女子短期大学等を運営)で、昨年4月、理事長に本法人副理事長の内田信子さん、短期大学学長に田口香津子さんが就任され、女性2トップで活躍されています。女性参画研究会として嬉しいことです。(理事長 山崎)

●本法人の山崎和子理事長が去年5月、県政功労者知事表彰を受けました。表彰状には「女性参画研究会・さがにおいて女性の政治参画意識を

高める活動を展開するなど男女共同参画の推進に尽力し県勢の発展に寄与されたその功績」に対してとあります。

山崎理事長は「会員皆様の活動に対して贈られたもので、個人が頂いたものではない」としてお祝いの会などは辞退されましたが、嬉しい出来事として、この場を借りてご報告させていただきます。

(副理事長 内野・内田)